

'08 秋

4 日目：熊野～古座 60km

## < けつはディープに >

今朝は 4:30 にホテルを出る。案の定、右ハムストリングがつり気味で、まともな走行ができない。道路は、ずっとフラットで歩道もしっかりしており走り易いのだが、500m 走っては 100m 歩くという行軍になった。10 時過ぎには、勝浦に着かねばならないので、このペースだけは守る。出だしから、キロ 8 分という泣きたくなるような遅さで 40km をカバーしなければならない。6 時間はかかるだろう。

新宮市の手前の、紀宝町ウミガメ公園で日の出を迎えた。熊野灘に昇る朝日を眺めていると、自分の行動に実感が湧く。「あっ、俺は今こんな所にいるんだ。」と我に返るのだ。

1km の新熊野大橋を渡って、新宮市街地に入った。ここからは和歌山県だ。ちょうど通勤通学時間帯で、人が慌ただしく往来している。その中で私だけが、ポツンと異次元の世界にとり残されたような錯覚にとらわれた。当たり前だろう、非日常的なことをやってるんだから。誰一人、見向きもしない。

新宮から勝浦までの 14km は、走り半分歩き半分でなんとか持ち堪え、10 時過ぎに勝浦の美しいホテル街が見渡せる海岸にやって来た。その 1000m ほどの海岸には、目を美晴るような白い砂浜が横たわっている。思わず国道を逸れて、遊歩道に入り込んだ。好奇心旺盛過ぎるおっさんには、こういうのって絶対見逃せないんだよなあ。まったく困ってしまう。

遊歩道は、幅 2m の総タイル張だ。脚の痛みも忘れて、つい気持ちよく走ってしまった。お調子者かよ！俺の脚は。おっと、更田さんに電話しなきゃならん。ケイタイを取り出して、南紀新聞勝浦支局を訪れる手筈まで決め、場所を尋ねようとする、「この電話は残高不足で、これ以上通話できません。」と言って、突然切れてしまった。

笑わないでほしいが、私のケイタイは、今時珍しいプリペイドだ。旅行の時、車に乗る時、長いロードに出る時、にしか持たない。普段は家にいるから、要らないのである。年間 1 万円のカードで事足りるって訳だ。車に乗る時やロードに出る時は、事故に遭遇する可能性があるから持つ。今回の旅では、事前に確認した時は残高十分だったが、SP ナガオカ氏との長電話で消費したのだろう。その都度確認すればよかったのだが、後の祭り。ずっと AU の店はないし、コンビニもないしで、ハテ困ったぞ。どこかで公衆電話を探さないといけない。丁度、グランドゴルフに興じているお爺さんがいたので、「これをまっすぐ行けば、国道に出られますか。」と尋ねると、「ああ、あの階段を上り橋を渡ればいいんじゃない。」と教えてくれた。

教わった通りに 2km ほど行くと、商店街を抜けて港に出てしまった。あやや！どうやら旧道に迷い込んだようだ。港は、外国人観光客も大勢いて賑わっていた。魚屋の店先には、ぶつ切りの鮪の頭がいくつも並べられていた。すげーと感心してる場合ではない。観光案内所で AU の在処を訊くと、串本まではないと言う。公衆電話はその先にあるが、故障中だとのこと。くそう、ついていない。斯くなる上は、どこかの店で昼飯を食べて、電話を借りよ

う、ということになった。

何度でも言うが、私はこうと決めたら行動は速い。50m 先に、「みはらし食堂」なる冴えない店を見つけて入った。鮪丼を注文し、女将さんに訳を話して電話を借りた。更田さんに連絡したらなんのことはない、すぐ近くだった。

では、鮪丼をいただきよう。なんこれ、出てきた丼にビックリ仰天！鮪のてんこ盛りではないか。びんちょう鮪のツケだ。思わずビールと言いかけたが、後の取材のことを考えて止めておいた。たまには、分別が有るところを見せなければなるまい。

丼は、食っても食ってもご飯が出てこない。これが本当の鮪丼だそうだ。じゃあ、日頃大分県内で食べているのは、一体何なんだ。鮪が 10 切れのっていい方だ。

支局で小一時間ほど取材を受け、更田氏に見送られ、勝浦に別れを告げた。11:40、目的地の串本まで、約 30km だ。彼の視線がある内は無理して走ったが、角を曲がり国道 220 号線にでると、脚がピタッと止まった。支局で座っている間に、筋肉が強張ってしまったのだろう。全く力が入らない。残り 30km を歩く羽目になるのか。

ここから、もどかしさとの戦いが始まった。なんたって走れないのである。走ろうとして 10m 位行くと、右ハムが肉離れ寸前になる。本物の肉離れをやったら、万事休してしまう。歩くしか手がなくなった。

平地といえども海岸線だから、小刻みなアップダウンが続く。これが意外と体に応える。上りならずと上り、下りならずと下りの方が楽だ。体がそれに慣れてしまうからである。波長の短い上り下りには、もはや反応しなくなった。訳もないのに立ち止まり、時間を潰すことが多くなった。歩くだけがこんなに辛いとは、今まで考えたことはなかった。距離の稼げないことに苛立ち、思いつく限りのアクタレを發した。

湯川という温泉郷を通り、鯨で有名な太地町への分岐点にサークル K があった。国道から 100m ほど太地方面に入った所にあり、観光客で溢れていた。やや便意を覚えるが、100m はしんどいし、トイレが塞がっていたらいかんと思ひパスした。国道沿いにあった太地駅のトイレは、行列ができていて無理、むり、ムリ。どうにかなるだろうと、ボソボソ歩いている内に便意は募り、どうにも我慢ができなくなった。こうなっては、最終手段に訴えるしかない。そう、雉撃ちである。

雉撃ちには、適した場所が必要である。道路から見えてはいけない。奥深く入り過ぎてはいけない。平地でなければいけない。数々の条件をクリアする所は、ザラにはない。

下里という地区を通り過ぎ、油汗をにじませながら進むと、やっと見つけましたグッドプレイス。車が来ていないのを確認して、脱兎の如く入り込んだ。

リュックを降ろし、ボトルホルダーを外して準備にかかった。まず、棒きれを探して穴を掘る。深くなくてもいいが、B4 紙大の広さは必要だ。次に、穴の両側をしっかりと固めて足場を確保する。ナニの最中にバランスを崩したら、悲惨なことになるからだ。最後に、ティッシュペーパーを何枚も重ねて 3 組用意し、ペットボトルのキャップを外して前に置く。これで、準備完了だ。私は、ウォッシュレット派である。ペットボトルを傍に置くのはそのためだ。一度拭き、もう一度拭いて、三度目のティッシュを水で湿して拭く。そして手を洗う。清潔極まりない。

さて本番だ。ピタリとスタンスを決め、タイツとショーツを膝まで下げる。こういう時も、デソトトライアスロンショーツは優れものだ。よく伸びて、かなりまで開いても窮屈ではない。そして、けつの位置はディープだ。膝を、鋭角になるまで曲げなければならない。雉撃ちを要する場合、ナニはたいてい拡散するやつだ。靴にとぼちりがかかったり、お尻にオツリがきたりしてはいけない。ここで、日頃のウェイトトレーニングが役立つ。脚は痛い、微動だにしない。私は、ハーフスクワット(膝曲げ角 90°)の状態でも1時間も静止していることができる。

無事にコトを終えて、後始末をした。穴を埋めて上に枯れ草や木切れを被せ、形跡を消しておく。やりっ放しというのはまずい。雉撃ちにもマナーってやつはある。私の雉撃ちはお手本だ。大地からの恵みは大地に返す。恐らく、この周辺の木々は立派に育つだろう。

ちなみに、私は一昨年スマイルランの時、静岡県菊川市の小夜の中山トンネル(お茶で有名な牧の原台地)を抜けた処で、雉撃ちをやった。小川を跨いでやったので、天然の水洗トイレだった。長男の道範は、国東 100km マラソンの時、憩いの村国東～武蔵町古市の直線道路の脇の田んぼでやったというツワモノだ。車がバンバン通り、歩道からは丸見えの所でよくやるものだ。私は、あそこでは絶対ようせん。我が息子ながら尊敬する。ともあれ、けつ癖の悪い親子であることは否定できないなあ。

話が臭くなって申し訳ない。ジャーニーに戻るとしよう。

結局、この行為に 20 分程費やし、スッキリしたのはいいが、体力も気力もかなり持っていかれた。やはりディープは応える。

重い脚を引きずりながらも、串本まであと 12~3km 付近までやってきたが、もうヘトヘトである。更に悪いことには、追い打ちをかける様に雨が落ちてきた。春のジャーニーを思い出す。「雨は心まで濡らす」だ。

古座の手前に、「AU 串本店、8.7km」という看板があった。普通なら 8.7km なんぞへでもないのに、この状況では途方もなく長く感じられる。

新古座大橋にさしかかる所で、雨脚が強くなった。右矢印で古座駅という標識がある。ここで、私の脚は不可解な行動に出た。古座駅の方に向かったのである。もう限界だ。雨も激しくなった。あと 8km だが、これ以上歩くのはイヤだ。ここで中断しよう。来年は、ここから始めればいい。そういう潜在意識が起こした行動だろう。ならば、リュックの中に入っている地図や時刻表を確かめんかい。日豊線よりもローカルなんだぞ。

すっかり冷静さを失い、駅はすぐ近くで、行けばなんとかなると思っていたようだ。人間、極限状態に追い込まれると、何をしでかすか解らない。今考えても、説明がつかないのだ。

古座川沿いをトボトボと上って行き、道行く人に尋ねると、駅は遥か向こうの古座大橋を渡って突き当たりとのことであった。1km はあるだろうか。しかし、今更引き返す訳にはいかない。

やっとこさ橋にたどり着き、駅に向かう高校生に電車の時刻を尋ねた。4:21 だそうだ。しめた、間に合った。まだ 200m はあるが、俺の時計は 4:19 だ。余裕があると思い、つい速度を緩めた。ところが、駅舎に着くがいなや発車ベルが鳴り出した。しまった、俺の時計は 1 分遅れちよったんだ。気付いても、時すでに遅し。形振り構わない懸命のダッシュにも

かかわらず、電車は行ってしまった。5秒差だった。ああ無情！日豊線なら待ってくれると。上り新宮行き電車から降りてきた人々に、「かわいそうに、待ってあげたらいいのにねえ。」と同情の言葉を投げかけられても、呆然と立ち尽くすだけだった。

とんだ幕切れである。仕方なしに、国道まで出てタクシーを拾い、串本 AU 店まで運んでもらった。せめて、串本の夜を楽しまなければ気持ちが滅入ってしまう。

海には滅法強い水陸両用重戦車、雨にはからっきし意気地がないということが証明された最終日だった。